

## 入選

# テーマ：誰かのために、わたしが出来ること 「1200km向うのかつおぶし」

岡山県・山陽女子高等学校3年 南いくえ

先日、一通のメールが届いた。

「ご無沙汰しております。今度、私の鯉節をネット販売することになりました。ご参考までに商品画像を添付しますので、ご覧下さい。お忙しい中、誠に申し訳ございませんが何卒宜しくお願い申し上げます」。なんだろう？ダイレクトメール？添付されている画像を見て思わず「あっー」と言葉をあげてしまった。Nさんのかつおぶしだ。

私は震災から5カ月経った昨年夏、岡山から1200km離れた東北をボランティアのために訪問した。避難所となっている小学校へ足を運んだ。高台になっている避難所の小学校からは、津波ですべてを失った市街地の様子がよく見える。避難されている方へどう声を掛けてよいかわからない。言葉にならない言葉をかみしめしていると、ある初老の男性が落ち着いた笑顔で私の傍に立ち、

「あなたは何も言ってくれなくていい。今の私の現状を見て、あなたの住む遠い地で伝えてほしい。ただそれだけだ」

と話してくれた。男性の名前はNさん。Nさんはポケットから煙草を取り出し、ゆっくりと火をつける。

「いや、女房からは禁煙しろとうるさく言われてただけだね…。今じゃそんなこと言ってくれる人は誰もいないしな…」

ますます私はどう返したら良いのか分からない。とまどう私に気付いたのか、Nさんは

「ちょっと待ってろ」

と小走りにNさんの住まいである校舎の奥に消えた。数分後、Nさんは小さな袋を手に私のところにもどってきた。

「これ、食べてみて」

袋を開けるとふわっと香ばしいにおいが飛びこんできた。かつおぶしだ。削られたかつおぶしをひとつまみ、口へほおぼる。たちまち広がる海の味。なんと表現したらよいのだろう。とりあえず、おしい。

「私は、あの地震の日までかつおぶしの工場を持っていてね、でも津波でなにもかも失ったよ。これは工場のてっぺんにしまっていて無事だった在庫。袋が汚れているから出荷はできない。でもおいしいだろうっ」

Nさんの目は笑っているが、その瞳の奥はどことなく寂しい。聞くと津波で工場と自宅と家族を失い、残ったのは、わずかばかりの在庫と工場であった場所から拾い集めた泥と油にまみれた加工機械。今は避難所生活をしているが、いずれは残ったもので再起をはかりたいとのことだった。

「私、Nさんのかつおぶし、大好きです。工場が再開したらきつと教えてくださいくださいね！買いますから！」

Nさんを励ますつもりでとっさにこんなことを言ってしまった。本当にNさんの工場を建て直すことができるのだろうか？私はすぐ無責任なことをNさんに投げかけているのではないだろうか？Nさんはそんな私の心の中で分かっていたのだろうか？何も言わずにただ笑ってうなずいていただけだった。

もし私がNさんの立場だったらどうだろう。工場を建て直そうという力が湧いてくるだろうか。とても無理だ。もう何もかも嫌になって自暴自棄になってしまいかもしれない。被災地を励ましに行ったつもりが逆にNさんから生きる力とは何かを教えてもらった訪問となった。

岡山に戻ってからは変わらぬ日常。いつしか津波で壊滅した街の様子や、どん底にも負けないNさんのことが穏やかな毎日に上書きされてしまっていた。そして震災から1年5カ月たったその日に、あのメールが届いた。頭の奥から東北を訪れたあの日の記憶がかつおぶしを注文した。注文フォームの備考欄にはこう添えて。

「去年、あの避難所でつまんだNさんのかつおぶしの味が忘れられません」

かつおぶしはあと数日で私の手元に届く予定だ。